

(報 告)

薬剤師 2 人体制による持参薬鑑別～有用性の検討～

金本 祥志 中野 歩 前田 祥花 清水 浩幸 國森 公明

鳥取赤十字病院 薬剤部

Key words : 持参薬鑑別, 代替薬提案, 処方支援

はじめに

近年、薬剤師の職能拡大に伴い、病棟での薬物療法における薬剤師の積極的な関わりが医療の質の向上および医療安全の確保の観点から非常に有益であることが報告されている。その中で、薬剤師による持参薬鑑別という業務に関しても、採用医薬品の制限や後発医薬品の使用促進等により、院内採用以外の医薬品を持参するケースが多くなってきており、その重要性も増してきている。当院での持参薬鑑別は、鑑別作業だけでなく当院採用薬の代替推奨薬提示（対応量を含む）や持参薬オーダー仮登録をしているため、薬剤部調剤室において薬剤師 2 人体制で行っている。薬剤師 1 人体制であれば、持参薬鑑別以外の病棟での薬物療法業務により時間を費やすはざである。そこで今回、薬剤師 2 人体制の必要性を確認することを目的として解析・検討を行った。

当院における持参薬鑑別の手順

電子カルテシステム（NEC MegaOakHR）の持参薬鑑

別機能にて持参薬鑑別書を作成している（図 1）。入力には順に薬品名、用法用量、持参された薬の総数とし、日数・回数は総数を入力すると用法用量にあわせて自動入力される。隔日服用などの指示があるものは薬剤毎のコメントに入力を行い、フリーコメントとして処方施設名、一包化情報、継続中処方薬の持参忘れ（お薬手帳や情報書などで確認できた場合）などの内容を入力する。全ての入力が完了すると紙媒体として印刷し、2 人目の薬剤師による確認を経て、オーダー上に登録を行うという流れである。

代替薬の提案に関しては、当院のルールに従って以下のように行う。持参薬と規格違いのものが院内採用の場合は、同一用量となるように採用規格と 1 日量を入力する。（例）プラバスタチン錠 5 mg 1 錠→10mg 0.5 錠。同一成分の代替薬が院内採用にない場合は、同系統薬で同一効果と考えられる薬を対応量も含め報告する。（例）タムスロシン OD 錠 0.1 mg 1 錠→フリバス OD 錠 50 mg 1 錠。ただし、抗不整脈薬などの代替薬を提案することが難しい薬は、フリーコメントで「持参切れの場合は専門



鑑別報告書フリーコメント入力画面

フリーコメント

・当院内科のみ
 ・①②③：一包化
 ・お薬手帳確認にて、同日処方にかきさらタン点眼液の処方がありますが現物ありませんでした。

鑑別薬剤一覧・編集		作成状況:		オーダー登録状況:				フリーコメント	あり	
薬品名	後	用量	用法	日数・回数	総数	採用区分	代替薬	薬剤コメント	一般名	薬効
☑(持)アムロジピン錠5mgあすか	●	1 T	1日1回:朝食後	7 日	7	あり	あり		ベンズル酸アムロジピン	冠血管拡張剤
☑(持)フラバスタチンNa5mgサワイ	●	1 T	1日1回:夕食後	7 日	7	あり	あり	隔日	フラバスタチンナトリウム	その他の高脂血症用剤
☑(持)カロナール錠500	●	1 T	発熱時	5 回	5	あり	あり		アセトアミノフェン	アニン系製剤
☑(持)タムスロシンOD錠0.1mg医工	●	1 T	1日1回:夕食後	7 日	7				塩酸タムスロシン	その他の泌尿生殖器官及び

図 1 持参薬鑑別入力画面

医に相談をお願いします」と入力している。

方 法

平成28年10月から平成29年3月までの6か月間に行った全ての持参薬鑑別のうち、1人目が作成した持参薬鑑別書に2人目の確認者が鑑別の不備を発見し、その不備について1人目の作成者に報告を行い、2人にて内容を検討した後に訂正を行ったものを、不備のあった持参薬鑑別（以下：訂正例）とした。その件数を集計し、持参薬鑑別の行程順に2段階に分け解析を行った。代替薬の提案に関しては主にポケット医薬品集（白文舎出版）を参考にした。

1. 全体の訂正率・薬剤師経験年数別訂正率

当院薬剤師16人それぞれの鑑別件数と訂正数の集計を行い、薬剤師経験年数別（5年未満、5年以上10年未満、10年以上15年未満、15年以上30年未満、30年

以上）に分類し比較した。当院薬剤師経験年数別の構成は、それぞれ3人、4人、3人、3人、3人であった。

2. 訂正のあった持参薬鑑別の項目別解析

- (1)「持参薬自体」に関わるもの（持参された薬に関し、お薬手帳や情報書通りに薬品名や用法用量などが正確に入力できているか）
 - (2)「代替薬提案」に関わるもの（持参薬から当院採用薬への切り替えの場合における同種同効薬などの提案に訂正がないか）
 - (3)「その他（（1）（2）に該当しないもの）」（フリーコメントでの誤記載などはないか）
- の3項目に分け、それぞれの訂正率を比較した。

結 果

1. 鑑別件数と訂正件数

6か月間の持参薬鑑別件数は2,825件、1か月当たり

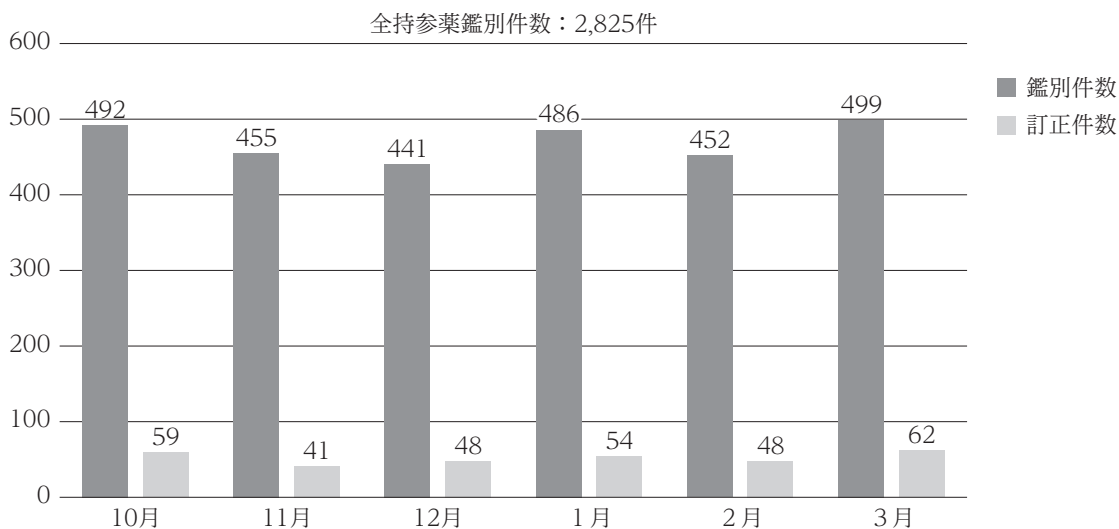


図2 月毎の鑑別件数と訂正件数

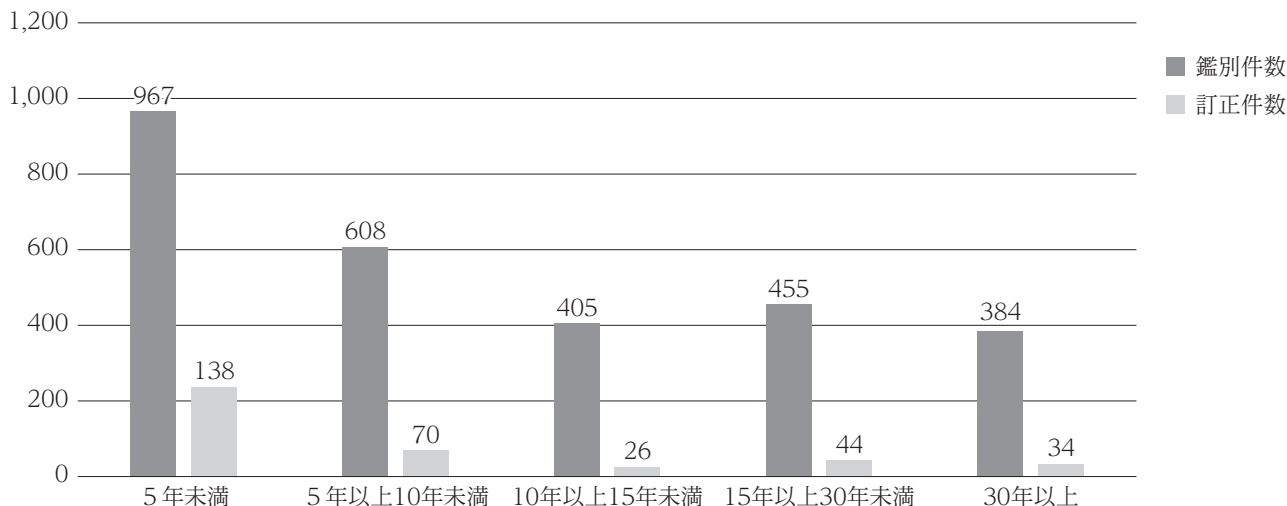


図3 薬剤師経験年数別の鑑別件数&訂正件数

では平均470件であった。6か月間の訂正があった総数は312件、ひと月当たりでは平均52件であった。全体の訂正率は11.0%であった(図2)。薬剤師経験年数別訂正率では、5年未満で14.3%、5年以上10年未満で11.5%、10年以上15年未満で6.4%、15年以上30年未満で9.7%、30年以上で8.9%であった。薬剤師経験年数ごとの鑑別件数に差はあるが、訂正率は若手薬剤師が高く、中堅薬剤師が低いという結果であった(図3)。

2. 訂正があった持参薬鑑別の項目(図4)

訂正のあった持参薬鑑別件数312件の内訳は、「持参薬自体」に関わるもの104件(33.3%)、「代替薬提案」に関わるもの179件(57.4%)、「その他」29件(9.3%)となり、「代替薬提案」に関わる訂正が一番多いという結果であった。

「持参薬自体」に関わる訂正例104件の内訳を以下に示す(図5)。一番多かった件数は、[用法用量の入力間違い] 60件(57.7%)、ついで[持参薬はあるが鑑別書に入力漏れ] 13件(12.5%)、[他規格ある薬剤の規格入力の間違い] 11件(10.6%)、[隔日服用や服用日

指定など特別な服用方法に関する薬剤のコメント漏れ] 11件(10.6%)、[ジェネリック医薬品と先発医薬品の入力間違い] 9件(8.7%)であった。

「代替薬提案」に関わる訂正例179件の内訳を以下に示す(図6)。[薬品名・規格・用法用量など、1人目の鑑別者が代替薬を検討して入力したが、2人目の確認者

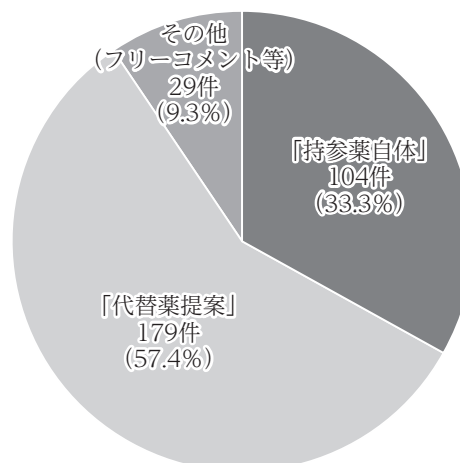


図4 訂正のあった持参薬鑑別の項目別解析

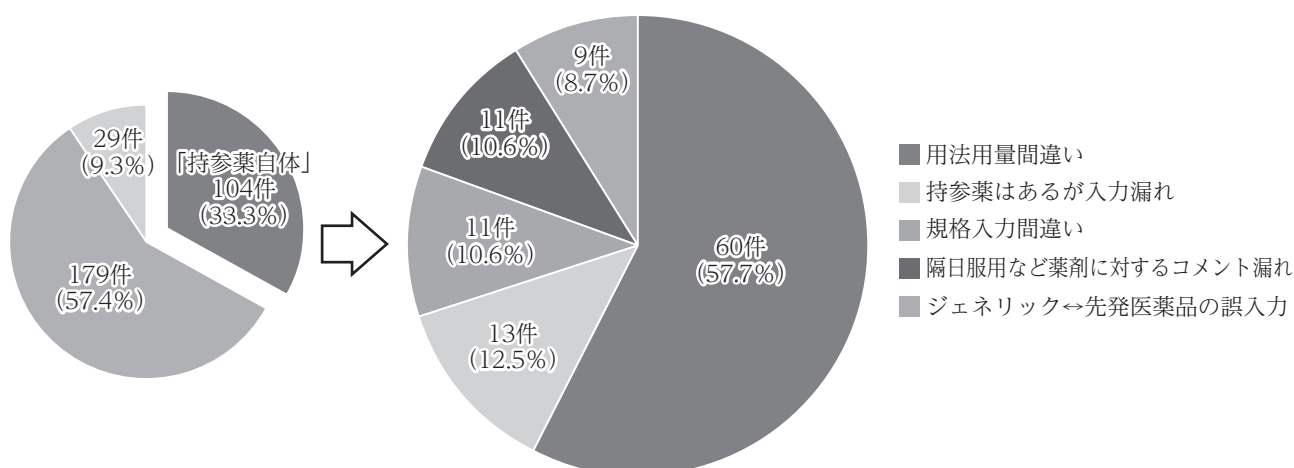


図5 「持参薬自体」に関わる訂正例の内訳

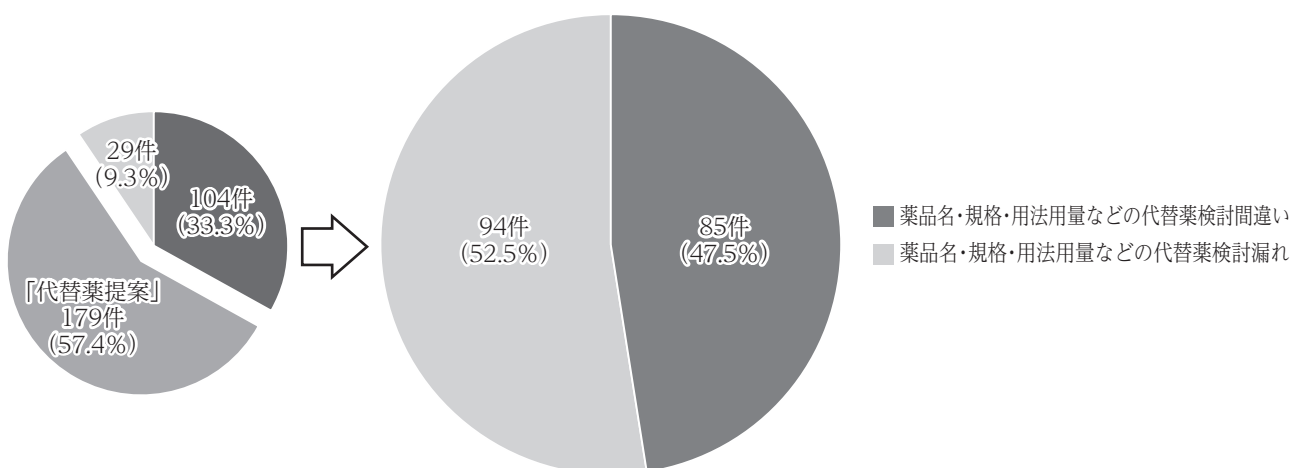


図6 「代替薬提案」に関わる訂正例の内訳

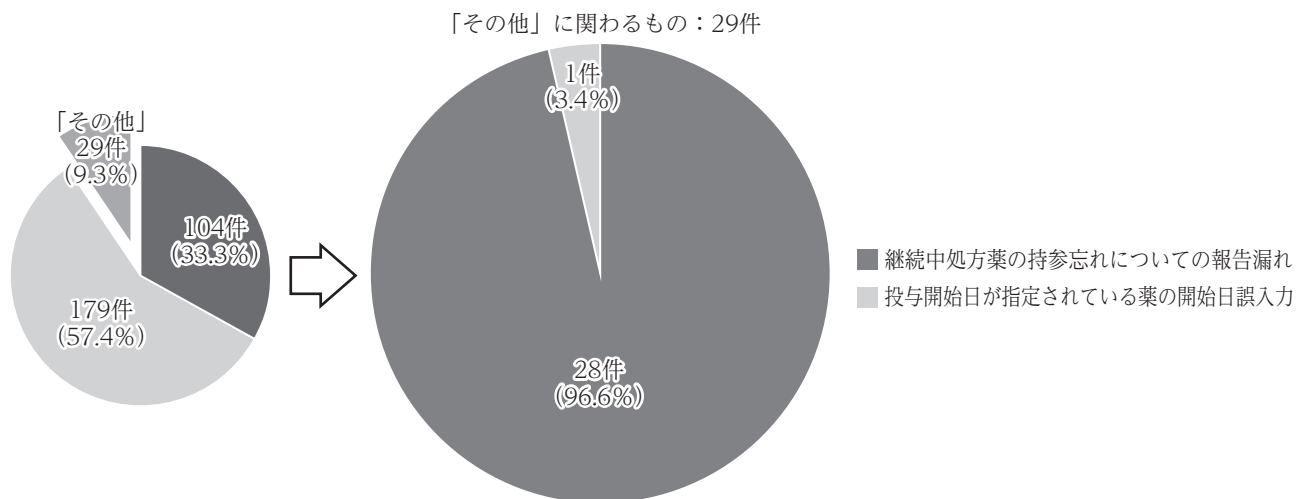


図7 「その他」に関わる訂正例の内訳

表1 2人体制の持参薬鑑別で防げた事例

【持参薬自体】

1人目誤入力内容

・ワーファリン錠 1mg 3錠	×	→ 1錠○
・クロピドグレル錠 50mg	×	→ 75mg○
・ネシーナ錠 12.5mg	×	→ 25mg○
・ティーエスワンOD錠 コメントなし	×	→ 隔日服用○

2人目訂正内容

【代替薬提案】

持参薬内容

持参薬内容	1人目当院採用薬への提案内容	2人目訂正内容	
・カロナール錠300mg 1錠	→ アセトアミノフェン原末600mg	×	→ 300mg○
・ハルラック錠0.25mg 1錠	→ フリバスOD錠50mg 1錠	×	→ ゴルピデム錠 5mg 1錠○
・シロスタゾールOD錠100mg 1錠	→ 50mg 4錠	×	→ 50mg 2錠○
・ネオーラルCap 50mg 2 Cap	→ 25mg 2 Cap	×	→ 25mg 4 Cap○

【その他（コメント）】

現在内服している薬の持参忘れ，1人目は気付かず，2人目が発見し報告

- ・バルプロ酸細粒
- ・シクロスポリンCap 50mg
- ・リカルボン錠50mg

からの不備の指摘にて再度2人にて検討し修正した]が85件(47.5%)，[1人目の段階で代替薬の検討をし忘れており，2人目の確認者が新たに入力した]が94件(52.5%)であった。

「その他」に関わる訂正例29件の内訳を以下に示す(図7)．[継続中処方薬の持参忘れについての報告漏れ]が28件(96.6%)，[投与開始日が指定されている薬の開始日誤入力]が1件(3.4%)，という結果であった。

3. 事例

2人体制の持参薬鑑別で防げた事例を表1に示した。

ワーファリンや血糖降下剤など医師の診療に影響を与えるだけでなく，患者に重大なリスクを与えてしまう事例も含まれていた。

考 察

今回の解析から，持参薬鑑別を薬剤師1人体制で行っていた場合，訂正率11%という結果より約10件に1件の割合で持参薬鑑別に訂正を要する結果であった．特に薬剤師経験年数10年未満の薬剤師の訂正および薬剤師経験年数に関わりなく代替薬提案の訂正が多く，これらをいかに減らしていけるかが，今後の課題だと考える．訂正のあった持参薬鑑別すべてがリスクの高いものではなかったが，時に重大なリスクが含まれているものがあることも分かった．2人体制の持参薬鑑別を行うことで，この重大なリスクを回避できている．そのため，代替薬の詳細な推奨があるか否かの違いもあると思うが，

多くの施設で導入されている1人体制の持参薬鑑別ではインシデントが生じる可能性が高く、当院の体制としては2人体制の持参薬鑑別が有用と考えられる。今後の対策として、若手薬剤師からベテラン薬剤師まで代替薬提案に関し統一した内容の提案が行えるよう、現在作成中の代替薬提案一覧を早急に作成することや、薬剤師経験年数の短い薬剤師同士での持参薬鑑別を避ける等の業務上の工夫が必要である。今後も同様に集計を行い、訂正

の多かった薬のリストアップ等を行い、その結果を薬剤部内で周知することで、傾向を把握し、さらなる訂正数の減少に繋げていければと考える。

文 献

- 1) 瀧原 徹 他：ポケット医薬品集. 7-1379, 白文舎, 2016.
- 2) 医薬品情報WEB検索システムMDview